

アルパカの導入からアルパカ散歩の実施までについて

(社)日本動物園水族館協会 北海道ブロック春季飼育技術者研究会 ○専門員/山ロー仁、大場秀幸



釧路市動物園では、2008年11月9日のアフリカゾウに続き、2009年10月4日にケープキリンが死亡し、動物園の正門から入ってすぐのエリアに空いている展示場が2か所となり、来園者に寂しい印象を与えていました。その当時キリンの導入が困難であったため、キリンの獣舎を利用して簡単な改修で、替りに展示出来る動物がないか検討していました。

こうした中、キリン舎はシマウマ舎、ダチョウ舎、ゾウ舎などの熱帯動物を展示しているエリアに配置

されており、展示法としては違和感がありましたがキリンが導入出来るまでの仮展示として、当時テレビなどで人気のあったアルパカのオス1頭とメス2頭を2010年11月2日に北アメリカのアルパカ牧場から輸入し飼育を開始することにしました。

キリンの放飼場はモート式で来園者からは距離があるため、放飼場内まで入れるように誘導路を整備し、アルパカを金網越しに見られるように改修しました。しかし、展示開始当初、金網越しではアルパカが来園者のそばまで来る事はあまりありませんでした。このため来園者に、アルパカをもっと近くで見てもらい、家畜化し利用されている毛の特性を理解してもらうためには、散歩という形で来園者の近くまでアルパカを連れ出し、解説や触れてもらう機会を作るのが効果的と考えました。

そこで、3個体の中で一番落ち着きのあるオスを選択し、アルパカの頭に合う無口を市販の材料で制作し綱を付け、キーパーの誘導に従って付いて歩き、周りに人が集まっても大人しくしているように、引き馬の訓練法を参考にしてアルパカを訓練しました。その結果、アルパカの散歩は、釧路市動物園の人気ガイドメニューとなっており、来園者にアルパカについて知っていただくだけでなく、情操教育においても、効果的な結果が出ていると思われれます。

現在は、子供動物園の隣にアルパカ舎が建設され、今までに3頭が繁殖し、散歩に使用する個体も最初に繁殖したメスに切り替えてアルパカ散歩を継続しています。

